

『アイヌ語ロシア語辞典』中のアイヌ語樺太方言テキスト*

阪口 諒

キーワード：ドブロトヴォルスキー、『アイヌ語ロシア語辞典』、樺太アイヌ、アイヌ語、サハリン

はじめに

ロシア軍医ミハイル・ミハイロヴィチ・ドブロヴォルスキー（Михаил Михайлович Добротворский, 1836～1874）は、1867年からサハリン島に5年間滞在し、医者として働く傍ら、アイヌと親しく付き合い、樺太アイヌの言語や文化に関する貴重な記録を残した。ドブロトヴォルスキーのアイヌ関連資料は、『アイヌ語ロシア語辞典』（Добротворский (1875)、以下【辞典】）にまとめられている。【辞典】には語彙だけでなく、付録としてアイヌ語テキストも含まれている。これは、ある程度の分量を持つ樺太方言テキストとしては最初期のものであるだけでなく、当時の水準としても優れたものであり、その価値は現在でも減じていない。また、【辞典】の辞書部（付録ではない部分）の例文には、付録のテキストから採られたものもあるため、テキストの分析は辞書部をより正確に理解するうえでも重要な作業である。【辞典】には、寺田吉孝・安田節彦両氏による日本語訳（ドブロトヴォルスキー（寺田訳）（1995～1997）、ドブロトヴォルスキー（寺田・安田訳）（2009～2019））があるが、巻末のアイヌ語テキストに関しては、もとより完全にはロシア語訳がされていないこともあって、その内容はよく知られていない。そこで、本稿では、すでにロシア語訳（とその日本語訳）がなされているものも含め、アイヌ語から日本語へ翻訳することにした。

本稿では、第1節で【辞典】について概観した後、第2節で、そこに含まれているアイヌ語テキストの語り手などに関する情報を述べる。第3節ではドブロトヴォルスキーのテキスト表記と現行表記の違いについて述べる。特に表記に関する注意点（単純なキリル文字からローマ字への単純な転写では済まない部分）について簡単に解説する。以下、第4節では文法的特徴について触れ、第5節でドブロトヴォルスキー「テキスト」の全文を、筆者による現行のローマ字表記版と日本語訳を付して示す。

1. 『アイヌ語ロシア語辞典』に関して

【辞典】には実際の生活の中で採録されたとされる語彙や文例、更に民俗情報が収録されている（【辞典】のアイヌ語、アイヌ文化資料としての重要性は中川（1985）、阪口（2020）参照）。見出し語は1万語を超えている。他の記録からの引用も多いが、その半分以上（5733語）は著者自身がサハリン島で収集したものである（このうち約100語は樺太アイヌの人名、511語は地名）。サハリンに5年間住んでいたドブロトヴォルスキーの【辞典】は、語数が多いだけでなく質も高く、ドブロトヴォルスキーは、その当時最も正確なアイヌ語の聞き取りを行った人物の一人であると言える。さらに、序文や付録に含まれる

* 本稿は科学研究費補助金特別研究員奨励費（課題番号20J11234）による成果の一部である。

論文は、樺太アイヌの文化を知る上で有用である。すでに阪口(2019)でも【辞典】の例文を使用して人称の分析を行っているが、他の資料の分析と矛盾せず、(人称接辞を正しく理解していたかとは別に)かなり正確に記録している。採録地は多くの場合不明だが、例文には西海岸中部に暮らしていたサンバク Sambaku (Самбаку) 若しくはサンバクシ・アイヌ Sambakus-aynu (Самбакус-айну)¹、カシトゥル Kasituru (Каситурү)、スケンノ Sukenno (Сукэнно) などの人物の名前があらわれることが多く(キリル文字のアクセント表記は原文に従った)、その周辺の語彙や例文が多いのではないかと推測される²。例文では、一人称単数として сокай (чóкай) [cookay] が広く用いられている点など、戦後の聞き取り調査の中心となった西海岸北部の言葉とは差異が見られる。以下、アイヌ語テキストを翻訳する際には、ドブロトゥヴォールスキー(寺田訳)(1995~1997)、ドブロトゥヴォールスキー(寺田・安田訳)(2009~2020)を参照している(以下、ドブロトゥヴォールスキー(寺田訳)(1995~1997)を【寺田訳 1~5】、ドブロトゥヴォールスキー(寺田・安田訳)(2009~2020)を【寺田・安田訳 6~26】とする)。

2. 【辞典】付録のアイヌ語テキストに関する基本情報

アイヌ語のテキストは、不明点が残っているものの、この当時のものとしてはかなり正確なテキストであることがうかがえる。i と e、o と u が混同されていることを除けば、表記に関してはかねがね正確である³。母音の長短の区別はなされていないが、テキスト 1 に関してはアクセント記号がつけられており、母音の長短を推測する手掛かりとなっている(筆者が復元したアイヌ語ローマ字表記では母音の長短を区別していないが、原典でアクセント記号が付されているものはローマ字表記でもアクセント記号を付与した)。

【辞典】以外で確認できない語彙も若干見られる。【辞典】辞書部にも掲載されている語彙は、その意味記述と突き合わせることが出来るという点で貴重なものと思われる。それは、【辞典】の語釈、例文には文脈を取り出したために分からなくなっているものがあるためである。

ドブロトゥヴォールスキーの筆記テキストは2つに分けられている。1つは、クスナイ Kusunay (Кусунай) の隊員を告解させるためにやってきて、去って行ったシメオン Simeon (Симеон) 神父に対するチウオカンケ Ciwokanke (Чивоканке) の言葉で、もう一つは、仲直りを望んでいる者の発話と、それへの相手の返答を記録したテキストである。【辞典】では前者(テキスト 1 とする)と、後者の半分(テキスト 2 ①とする)には比較的忠実なロシア語訳がつけられているが、後者のもう半分(テキスト 2 ②)にはほとんどロシア語訳がつけられていない⁴。

¹ 【辞典】序章 42 頁に、ナヨロ (Найеро) [註^{なより}一名寄、現ペンゼンスコエ Пензенское)] 出身のアイヌとある(日本語訳は【寺田訳 3】88)。Перепись (1995[1876]: 20) において、エペケレルム Эпекерерум [シラロロ Сирароро (白浦) から 4 露里の集落] でサンバクシ・アイヌ Самбакус-айну と記録されている男性で、ピウスツキ (井上訳) (2018: 613) で「サムバクス (Sambakus)」、千徳 (1929: 6) に「泊居のサンバクサイヌ」(名寄は泊居郡の村)とあるのも同一人物である。

² このうち、何人かに関しては阪口(印刷中)で家族関係や居住地の移動について扱った。

³ ただし、自らの語源解釈に基づいて表記を改めているところが【辞典】を通じて散見される。

⁴ 辞典の編者も「腹を立てている者の返答は、本辞典の著者によって訳されていない。」(【辞典】91; 【寺田・安田訳 26】146)としている。

テキスト1の語り手はチウオカンケで、【辞典】の記述（特に付録）からは、ドブロトヴォルスキーとかなり親しい関係だったことが覗かれる。しかし、居住地、出生地に関してははっきりしない。このテキストは、クスナイ（久春内）の隊員を告解させるためにやってきて、去って行ったシメオン神父に対してチウオカンケが述べたものだとのこと、またクスナイに診療所を持つドブロトヴォルスキーと親しく付き合っていたことを考えると、クスナイの周辺で暮らしていた可能性が高い。チウオカンケがアイ Ay (Ай)（相浜）やオトサン Ootosan (Отосан)（小田寒）の近くを歩いているときに化物を見たという記事や（【辞典】付録 63; 【寺田訳・安田訳 25】86）、チウオカンケの舅のアンチプニ Ancipuni (Анчипуни) がタコイ Takoï (Такой)（多古恵）を犬ゾリで走っていたという記事もある（【辞典】付録 83; 【寺田訳・安田訳 26】137）。

テキスト2の語り手は不明である。テキスト2の後ろには「チウオカンケは、この会話の中で次のことに気づいている。“an-ukohemakare ciki, pirika nanko (ань-уко-хемакаре-чики, пирика нанго) [注—アイヌ語からの訳は「私たちがお互いに（仲違いを）終わると良いだろう」]”すなわち、『和解できれば、おそらく、まあよからう』つまり、片方が『いやな思いをしなければならない』」（【辞典】付録 91; 【寺田訳・安田訳 26】146、アイヌ語表記は変更した）というコメントが付いているが、ドブロトヴォルスキーが採録したアイヌ語テキストの解釈に協力して、チウオカンケがコメントしているのではないと思われる。

3. 表記法に関して

本テキストにおけるアイヌ語の音素表記は服部編（1964: 34）に基づく。母音音素は5つ/a, i, u, e, o/, 子音音素は12個/p, t, k, c[tc], s[s~c], r[r~t], m, n, w, y[j], h[h_a,e,o, φ_u, ç_i], '[?]/である。音節頭には全ての子音が立つが、本稿で扱う方言で音節末に立つ子音は/p, t, k, s, m, n, w, y, h/の9つであると考えられる⁵。なお、必要がないかぎり、声門閉鎖音/ʔ/を省略している。

ドブロトヴォルスキーによるキリル文字アイヌ語文は、キリル文字をローマ字に転写するだけでは、現在広く用いられているアイヌ語表記（アコロイタク方式）とは離れたものになってしまう。キリル文字のローマ字転写は、おおよそ以下の通りにすると良いと考えられる（このテキストには出現しないが【辞典】に出現するものを含めている）。

a = a, б = p, в = w, г = h(~k), д = t, е = e, ё = yo, ж = c, з = c, и = i, й = y, к = k, л = r, м = m, н = n, о = o, п = p, р = r, с = s, т = t, у = u, ф = h, х = h, ц = c, ч = c, ш = s, (щ = s), ъ = -, (ы = y), ь = -, э = e, ю = yu, я = ya. （ - は何もないということ）

ここでは上の転写に関して、本テキストに即して、若干の説明を加える。

⁵ ただし、南サハリン南部では音節末に p, t, k がかなり保持されている（服部・知里 1960、Naert 1961 の多蘭泊出身者の語彙記録より）。

母音音素について

- [1] ドブロトヴォルスキーは母音の長短を区別していない。長母音と思われる個所をアクセントをもった母音としていることもある(例: трéкоpo (reekoro)「とても」)。服部編(1964)以降では、長母音は aa のように母音字を重ねて表すことが多いが⁶、本稿では長母音の表記は、ドブロトヴォルスキーの表記に合わせて、行わないことにする。
- [2] ドブロトヴォルスキーは母音字として а, и, i, y, э, е, о を用いるが、現行表記ではそれぞれに а, i, u, e, e, o を用いる(つまり、э, е には差がないことが多い)。例えば、原文 трéкоpo の代わりに本稿では reko-ro「とても」と表記する。ただし、語中の е が /ye/ を意図しているように思われる個所がある(21 行目)。*/ya/* は я と表記される。
- [3] 母音が無声化しているために表記されていないと思われる個所がある(例: снe: sine「一つの」)。

子音音素について

- [4] 子音音素 /p/ について、ドブロトヴォルスキーは б と п を使い分けるが、現行表記では p のみを用いる(アイヌ語には清濁の区別はない)。例えば、原文 táмбе の代わりに本稿では tanpe「これ」(tan「この」-pe「もの」と解釈されるため tanpe とした)と表記する。
- [5] 子音音素 /k/ について、ドブロトヴォルスキーは к と г を書き分けるが(ただし、г は /h/ を表す場合も多い)、現行表記では k のみを用いる(清音と濁音の対立はない)。例えば、原文 áреги の代わりに本稿では areki [ariki]「来る(複数形)」と表記する。
- [6] 子音音素 /c/ について、一例 т が用いているのを除いて(11 行目)、ч が用いられる。現行表記では c を用いる。例えば、原文 омáнчики の代わりに本稿では oman ciki「行く・なら」と表記する。
- [7] 子音音素 /s/ について、ドブロトヴォルスキーは с, ш を用いるが、現行表記では s を用いる(s と sh の区別はない)。укотисеру укохтэ と укотишеру—уко́хтэ に対して、ukociseru'ukohte「歩み寄る」となる。音節末の /-s/ は съ で表記される([12] 参照)。
- [8] 子音音素 /h/ について、ドブロトヴォルスキーは г, х を用いることが多いが(比較的古い時期の日本語転写でも横浜が иокогама となるように h (ハ行音) に г を使った例がある)、現行表記では h を用いる。例えば、原文 хама́нки, охта́ の代わりに本稿では ham an-ki「私は～しない」、ohta「～で／に」と表記する。игóхпа の代わりに本稿では i-hohpa「私・を置いていく」と表記する。
- [9] 子音音素 /r/ について、ドブロトヴォルスキーは tr で表記するが現行表記では r を用いる。тренькайнэ は renkaune「～のおかげで」と解釈される。
- [10] 子音音素 /w/ について、ドブロトヴォルスキーは в を用いるが、現行表記では w を

⁶ 金田一(1913a, b) などに見られるように、長母音を長音記号によって表すこともある(例: nū「聞く」)。知里(1973[1942])は、母音の長短が弁別的でないとして、ローマ字表記において長母音の表記は行っていないことがほとんどである(ただしカナ表記ではしばしば長音記号を用いて長母音に当たるものを表記している)。なお、服部編(1964)以降のものでも、Ohnuki-Tierney(1969)をはじめとした大貫恵美子氏による著作のように: を用いて、長母音を表示することもある。

- 用いる。оровано, хаврах канне はそれぞれ orowano 「～のところから」、hawrah kanne 「音を沈めて?」。ва が ua を表している (ua が wa に近く発音されているのか) 例もある (例: квани: kuani 「私 (人称代名詞)」)。
- [11] 子音音素 /y/ について、ドブロトヴォルスキーは й を用いるが、現行表記では y を用いる。例えば、原文 анокай の代わりに本稿では anokay 「私 (人称代名詞)」と表記する。なお、/ya/ という音節に関しては、я を用いている。
- [12] ь は現行表記で子音で終わる音節に付加されているが、現行表記ではこれを表記しない (例: котань: kotan 「村」)。

そのほか、気になるものとして、анекоюй ирайки (anekooyay irayki) (4 行目)、йй ирайкире анъ (yay iraykire an) (5 行目) という表記がある。それぞれ an-e-koyay'irayki 「私はお前に感謝する」、yay'iraykire-an 「私は感謝する」と考えられる (an- など人称接辞に関しては次節参照)。金田一が記録したものにもこれと似た語彙の iyaiiraikire、ヤイイライケレが出現する (金田一 1913a: 30; 山邊著・金田一編 1913: 76)。iyaiiraikire に対応する北海道の沙流方言は iyayraykere であるが、田村 (1996: 258) は iyayraykere を「i-yayirayke-re 人・感謝する・させる」と分析し、「iyayiraykere の y の後の i が落ちた形」としている。「感謝する」に関しても、yayrayke, yairayke ではなく、yayirayke としている (発音の詳細は同書 850 ページ参照)。iyay(')iraykere と思われる語彙は、ジョン・バチラーが幌別で洗礼式を行ったときの語りにもみられる。洗礼を受けたお婆さんが「Nishiba! Iyaiirai gere! Tane ku mokoro eashikai! Tane ku shini eashikai! と之を訳すと『先生、有難う存じました。是れで私は帰ることが出来ます、今こそ私は安心して休む事が出来ます』と述べている (太字は筆者、バチラー 1928: 230)。しばしば iyayraykere (服部編 1964: 338) と表記される語彙は、沙流方言に関して田村氏が指摘するように、樺太方言でも本来 iyayiraykere (沙流では iyayiraykere) という語彙で、iyay'iraykere と発音されることもあるのかもしれない。

4. 文法的な側面に関して

本テキストでは、一人称単数として AN 系 (anokay, an-/an, i-) と KU 系 (kuani, ku-) が用いられている (表 1 参照)。特にテキスト 1 では、an- (AN 系) が用いられる文章で KU (もしくは CI) 系とされる in- が用いられている (5 行目)。これは Sato (1989) や阪口 (2019) での指摘に当てはまらないが (文が切れていると考えれば矛盾はしない)、その理由は不明である。一つの可能性としては、konte の場合、in-konte という固定した表現なのではないかということが考えられる。金田一の著作から、in- の用例として挙げられているのは in-konte ばかりであることがその可能性の根拠である⁷。また、AN 系と KU 系では一人称主格・二人称単数目的格と、二人称単数主格・一人称目的格の場合、人称接辞は表 2 のようになる。

⁷ 金田一 (1955: 746)、金田一 (1960[1912]: 284, 285)、金田一 (1960: 128)。なお、二人称単数が主語の場合、konte は e-i-konte (AN 系), i-konte となると推測され、金田一 (1960[1912]: 284) では e-i-konte anpe (表記は変更) となっているが、金田一 (1955: 746) では、他の実在が疑わしい語形とともに、e-in-konte が記録されている。

人称に関しては、おおよそ以下のとおりであるが、**e-eh**「お前が来る」が想定される場所で **eh** としか書かれていないなど（2, 3 行目）、同じ音が重なる場合は特に聞き落としによると考えられる人称接辞の「脱落」が見られる。

表 1. 樺太方言における一人称のクラス (Sato1985; 阪口 2019 をもとに作成)

人称代名詞	自動詞主格	他動詞主格	他動詞目的格	略称	意味・使用域
kuani	ku-	ku-	in-	KU 系	単数のみ ・引用のみ
cokay [cookay]	-as	ci-		CI 系	
anokay	-an	an-	i-	AN 系	単複両様 ・限定なし

表 2. 主格目的格人称接辞（一人称×二人称単数の場合のみ）

	KU (CI 系も同様)	AN 系
一人称主格・二人称単数目的格	eci- (出現せず)	an-e- (4 行目)
二人称単数主格・一人称目的格	in- (5 行目)	e-i- (21 行目?)

4. アイヌ語テキスト

本節では、ドプロトヴォルスキー採録テキストの全文に対し、現行表記のアイヌ語と日本語による訳を付して示す。大文字か小文字かはキリル文字アイヌ語文に従ったが、行は区切りのいいところで行変えをした。テキスト 1、2 ①、2 ②の冒頭の短いコメントは寺田・安田訳 (2019: 144-145) による (アイヌ語表記は変更した)。本文脚注で引用した辞典、語彙集について以下の略号を用いた。

- 【ウェネネカイペ】 村崎編 (2010) 付録グロッサリー
- 【研究資料】 Pilsudski (1912)
- 【辞典】 Добротворский (1875)
- 【田村辞典】 田村 (1996)
- 【寺田訳 1~5】 ドプロトヴォルスキー (1995~1997) 「アイヌ語ロシア語辞典 (1)~(5)」(【辞典】の日本語訳)
- 【寺田・安田訳 6~26】 ドプロトヴォルスキー (2009~2019) 「アイヌ語ロシア語辞典 (6)~(26)」(【辞典】の日本語訳)
- 【物語】 山邊著、金田一編 (1913)
- 【物語語彙】 金田一 (1913b)

テキスト1

クスナイ Kusunay (Кусунай) (久春内) の隊員を告解させるためにやってきて、去って行ったシメオン Simeon (Симеон) 神父に対するチウオカンケ Ciwokanke (Чивоканке) の言葉。

- (1) Танъ котанъ охтá утáса—анъ кусú áреги анъ.
Tan kotàn ohtà utása-an kusú áriki⁸-an.
私はこの村を訪れるために来た。
- (2) Охгóроно окáй анъ тренъкáйнэ, тáне танъ котанъ та эх⁹.
Ohórono¹⁰ okáy-an renkáyne, táne tan kotàn ta eh.
私は長いこと逗留したおかげで、今、この村に「お前が」来た。
- (3) Танъ котáнь та эх¹¹ тренъкáйнэ, ан è нýкара¹².
Tan kotán ta eh renkáyne, an-è-núkara.
この村に「お前が」来たおかげで、私はお前に会えた。
- (4) Трéкоро иту—яськара¹³, трéкоро анекоюй ирáйки.
Rékoro ituyaskara, rékoro an-e-koyay'iráyki.
非常に親しみを覚え、私はお前にとっても感謝している。
- (5) Тамà инькóнтэ¹⁴. Трéкоро яй ирáйкire¹⁵ анъ.
Tamà in-konte. Rékoro yay'iráykire-an.
お前は私に玉をくれた。私はとても感謝している。
- (6) Тáмбе кусú пíрика на омáнчики—пíрика.
Támpe kusù pírikano¹⁶ omán ciki pírika.
そのため、気を付けていくと良い。

⁸ areki とあるが、ここでは ariki とした。

⁹ e-eh 「お前が・来る」が期待される。

¹⁰ 一般に ohorono という形で出現する (【方言辞典】樺太、257 頁など)。

¹¹ 註 9 参照。

¹² Eh renkáyne an-e-nukara と同じ文が【辞典】にも掲載されているが、ロシア語訳を見ても eh ではなく e-eh が期待される (【辞典】340 頁)。

¹³ ituyaskara : 「ituyashkara, [動] 可愛想=思ウ, 同情ス, イツクシム。」 (【物語語彙】42)。

¹⁴ an- (AN 系) が用いられる文章で KU, CI 系の目的格人称接辞 in- が用いられている (本稿第 4 節参照)。

¹⁵ 本稿第 3 節参照。

¹⁶ 原文は pirika na だが、pirikano oman 「よく・行く」と解釈するのが適切だと考え、na を no 「～で」(副詞を形成する接尾辞)に変更した。ただ、【辞典】の各所で副詞を形成する接尾辞-no が na と書かれている。例えば、「Pírika na mokorò! おやすみなさい! (字義通りは、よく眠りなさい)。Pirika na okày! あるいは pirika na an, さようなら、お先に失礼します (字義通りは、達者で暮らせ)。Pirika na oman! よい旅を!」 (【寺田・安田訳 16】199、アイヌ語表記は変更した)。

- (7) Игóхпа омáнь кусý—кара¹⁷
 I-hóhpa omàn kusù karà.
 [君は?] 私を置いて行くだろう¹⁸

テキスト2①

ウトゥバ・アイヌ utúpa-aynu (утúпа-айну)「仲たがいした人」¹⁹と和解を望んでいる人の思い²⁰。

- (8) Анокай анъ²¹ тренькайнэ, икойки áмпе ка хáннэ²².
 Anokay an-renkayne, i-koyki ámpe ka hánne.
 私の望み通り、私が叩かれることはなかった。

- (9) Наканъ кусу²³ понно—нияхка²⁴ уранкара кара²⁵ э и ки карачики,
 Nakan kusu ponno ne yahka urankarakara e-iki kara ciki,
 そのため、少しであっても、仲直りをお前がするなら、

- (10) оровано укораму пирика анъ ки нангò.
 orowano ukoramupirika an-ki nankò.
 それから仲良くするつもりだ。

- (11) Ирутасьпано укотисеру укохтэ²⁶/укочару укóхтэ/укотишеру—укóхтэ²⁷ анъ ки нанго.
 Irutaspano ukociseru'ukohte / ukocar'ukóhte / ukociseru'ukóhte an-ki nanko.
 お互いに、歩み寄りをするつもりだ。

¹⁷ 【寺田・安田 26】145 頁では кусý—кара となっている。Ihohpa oman kusu kara は「私は後で乗り物で行く(去る)」とある(【辞典】75, 【寺田・安田訳 11】243)が、なぜこの解釈になるのかは不明。

¹⁸ ロシア語訳では Самъ я отправлюсь послѣ「私自身も君の後に発つ」とある(【辞典】付録 90; 【寺田・安田訳 26】145)。

¹⁹ utupa aynu は「けんかの後、互いに憎しみ合っている者、完全に仲たがいした者(互いに歩み寄らないし、会っても相手を見ることさえしない)」(【辞典】381; 【寺田・安田訳 21】131)を意味するという。北海道の沙流方言で utupa は「この世とあの世とに別れている(「仏になった人に言う、そのほかには言わない)」(【田村辞典】797)という意味だという。

²⁰ 【寺田・安田訳 26】145 頁では「この一節のロシア語訳は書かれていない。」とあるが、テキスト2②の後のロシア語文はこの部分にかねがね対応している(むしろテキスト2②の訳がない)。

²¹ anokay が主語の文では動詞が複数形の okay になることが想定されるため、人称接辞であると解釈した。また、北海道の沙流方言でも、renkayne は主格人称接辞を取る副詞である(【田村辞典】572)。

²² 【辞典】に、「Kuani renkayne in-koyki anpe ka hanne, 私の望みに反して、私には[註一平手打ちが?]与えられなかった。」(【辞典】272; 【寺田・安田訳 19】101、アイヌ語表記は変更)というほぼ同じ文例が掲載されている(テキストと anokay, i- か kuani, in- が異なっている、本稿第4節参照)。

²³ nakàn-kusù「それゆえに」(【辞典】183; 【寺田・安田訳 16】205)とある。nak an kusu は「そう・ある・ので」だと思われる。

²⁴ niahka とあるが、ne yahka 「である・ので」とした。

²⁵ urankarakara「親しくなる、仲直りする」(【辞典】374; 【寺田・安田訳 21】117)。

²⁶ укотисеру укохтэ は ukociseru ukohte としたが、ти がアイヌ語の別の音に相当する可能性もある。ukociseru'ukohte 「(動) 互いに道を敷く、歩み寄り、知り合いになる」(【寺田・安田訳 21】103)。

²⁷ 註26参照。上の укотисеру укохтэ と、укотишеру—укóхтэ は с(s) か ш(sh) かというように綴りが若干異なるが、アイヌ語では音韻的な区別がないので、表記変更版では同じ綴りになっている。

- (12) Нахтэх орова²⁸ укорамувенъ, хаманъ ки нанго, панъ—коропе—нэ,
Nahteh orowa ukoramuwen, ham an-ki nanko nankoro pe ne,
そうして、それから仲たがいはいしないつもりだ、しないだろう。
- (13) поно—поно—ніяхка²⁹ уранкара кара э и ки карачики укораму пирика анъ ки.
ponopono ne yahka urankarakara e-iki kara ciki ukoramupirika an-ki.
ほんの少しであっても仲直りをお前がするなら、私たちは仲良くなる。
- (14) Нахтэх орова уко—ируска³⁰, анъ уко хемакаре³¹, анъ ки нанго. Ке!
Nahteh orowa ukoiruska, an-ukohemakare, an-ki nanko. Ke!
そうして、それからは互いに怒ることを、終わらせよう。さあ!

テキスト 2②

少し腹を立てているが、和解を望んでもいる者の返答。

- (15) Соннока а яйкурамуосьма³².
Sonnoka a(n)-yaykoramuosma.
本当に、私たちは納得した。
- (16) Энэ эсь ка³³ э ки кусу нэ яй, тамбе сонно яйко ахгунке³⁴, анъ ки кусу³⁵.
Ene eska e-ki kusu ne yay, tampe sonno yaykoahunke, an-ki kusu.
このようにお前がするなら(?),ただ、このことに本当に納得を(?)するつもりだ。
- (17) Маскинъ ханъ³⁶ неръ-анъ итах, хаманки кунъ ги кусу.³⁷
Maskin han neran itah, ham an-ki kun ki kusu.
あまりに、どのような言葉も、私は言わないつもりだ。

²⁸ 【寺田・安田訳 26】145) では orova となっている。

²⁹ 註 24 参照。

³⁰ 【寺田・安田訳 26】145) では уко-пруська となっているが、уко—ируска である。原本で и がかすれていて見えにくい、アイヌ語としてもここは и でなければ意味が通らない。

³¹ ukohemakare 「和解させる、仲直りさせる、仲裁する」(【辞典】367; 【寺田・安田訳 21】103)

³² 同じ文の「Sónno ka a-yay kuramu osma, 私はとても満足している、私はとてもうれしい。」(【辞典】307; 【寺田・安田訳 19】171、アイヌ語表記は変更)が辞書部に掲載されている。原文通り、yayku-(ramuosma)だと意味が通じないので、yayko-「自分に対して」とした。また、ay(<an-)yaykoramuosma の可能性がある。

³³ eska の意味は未詳。

³⁴ yay-「自ら」ko-「に対して」ahunke「～を入れる」と解釈し yaykoahunke とした。意味は「納得する」だろうか。

³⁵ この kusu は理由を表すのか、「～するつもり」だという意味なのか定かではないが、直後にピリオドがつけられているため、「～するつもりだ」という意味で解釈した。

³⁶ han は否定副詞で ham に由来。同じ行でもう一度 ham を言っている、この han は言いさしか。

³⁷ 註 35 参照。なお、直前の ги (ki?) に人称接辞がない理由は不明である。

- (18) Хамеумъ³⁸ поно-нияхка³⁹ уранкара кара⁴⁰ анъ экаракара,
Hameum pono ne yahka urankarakara an-ekarakara,
仕返しを少しでも（したいが?）、仲直りを私はする。
- (19) наканъ кусу тане оровано укорамувенъ, хаманъ ки кунино,
nakan kusu tane orowano ukoramuwen, ham an-ki kuni no,
そうであるので、今からは仲たがいをしないように、
- (20) экори—так ги⁴¹, укораму хайта⁴², хаманъ ки нанъ—коропе нэ.
e-kor(o) itak(i)hi, ukoramuhayta, ham an-ki nankoro pe ne.
お前の言葉を（?）不満に思うことを私はしないだろう。
- (21) Сне утахта нэ кусу⁴³, пороно хамейеяхка⁴⁴ пирика нанъ-коропе нэ.
Sine utahta ne kusu, porono ham e-(i)-ye yahka pirika nankoro pe ne.
親しい間柄なので、たくさん、お前が（私に）言わなくても、良いだろう。
- (22) Квани оровано поно—поно ку ки кату вемпе.
Kuani orowano ponopono ku-ki katu wen pe.
私の方から、少しばかり、したことが悪かった
- (23) Нияхъ кайки хаврах канне⁴⁵ ка уранко-понтэне⁴⁶
Ne yahkayki hawrah kanne ka urankopontene
けれども、おとなしくして、無駄口を叩くことを

³⁸ Hameum は「報復（侮辱に対する）。(同) asimpe [註一償い]」（【辞典】392; 【寺田・安田訳 21】153）。

³⁹ 註 24 参照。

⁴⁰ 註 25 参照。ramukarakara 「慰める」（【方言辞典】72）。

⁴¹ ローマ字に転写すると ekori-tak g(~h)i となるが (r が h に当たることが多いことは本稿第 3 節で触れた)、樺太の多くの方言では tak という音節はないので、ekoritak(i)hi と解釈した (i が無声化したか)。なお、ekoritakihi は e-koro itakihi 「お前の言葉」に由来すると思われる。

⁴² ukoramuhayta 「合意の不足」（【辞典】366; 【寺田・安田訳 21】101）。「ramuhaytape (n) 不満に思うこと、不平、文句」（【ウェネネカイベ】12）とある。

⁴³ sine utahta ne kusu : 「sne utahta ne kusu 我々は親戚だから（あるいは、親しいから）」（【辞典】305; 寺田・安田訳 19】167）。

⁴⁴ хамейеяхка が ham e-ye yahka か ham e-i-ye yahka のどちらを意図しているかは不明である。

⁴⁵ hawrah kanne (~hawrah kaane) の意味は詳らかではない。他の資料では「ハウラツカーネ、アイヌ、エンノ、イエー、カーネ、(どうか御手柔かに願ひます)」（【物語】43、下線は筆者）や Nah an kusu hawrah kanne urayki pateh hanka ki rusuy (Therefore, do not wish exceedingly to make a fight) （【研究資料】125、表記は変更）という用例がある。hawrah kanne に対応する【研究資料】の訳は exceedingly だと思われるが、その意味では【物語】の用例と合わない。知里（1973[1944]: 290）は【研究資料】の該当箇所を「だから、おとなしく、果合を思ひ止れ」としているが、知里の日本語訳通り「おとなしく」と取る方がふさわしいように思われる。

⁴⁶ 類例がなく、意味がはっきりしない。【辞典】にはこの語を含むほぼ同じ文（23～24 行目に相当）が掲載されており、その日本語訳は「しかし、たぶん騒いだり無駄口をたたかないほうがいいだろう」（【辞典】200; 【寺田・安田訳 17】103）となっている。そこから推測すると、urankopontene は разглагольствовать 「無駄口をたたく、空虚な大言を吐く」ということになるか。

(24) хаме—кіяхка пирика нанъ-коропе-нэ.

ham e-ki yahka pirika nankoro pe ne.

お前がしなくても、よいだろう。

(25) Нахтэхъ оровано ирутаспано укораму пирика анъ кичики пирика нанъ—коропе-нэ.

Nahteh orowano irutaspano ukoramupirika an-ki ciki pirika nankoro pe ne.

そうして、それから、私たちがお互いに仲直りをすると、良いことだろう。

(26) Нахтэх хемака.

Nahteh hemaka.

そうして、終わり。

参考文献

Добротворский, М. М. (1875) *Аинско-Русский Словарь*. Казань.

Naert, P. (1961) La vocabulaire aïnou de la Pérouse collationné sur le vif. In: *Orbis* X no.2: 320-355.

Ohnuki-Tierney, E. (1969) *Sakhalin Ainu Folklore* (Anthropological Studies No. 2). Washington, D.C.: American Anthropological Association.

Перепись (1995[1876]) Перепись айнов Южного Сахалина 1876 г., проведенная А.Я. Радковским // Исторические чтения. Труды Государственного архива Сахалинской области. 1995 [1876]. № 1. С. 6–27.

Pilsudski, B. (1912) *Materials for the Study of the Ainu Language and Folklore*. Cracow.

Sato, T. (1985) The First Person Objective Affix *in-* in the East Coast Dialects of Sakhalin Ainu. In: Executive Committee of the International Symposium (ed.) *Proceedings of the International Symposium on B. Pilsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture*: 157-167, Hokkaido University.

金田一京助 (1913a) 「樺太アイヌ語大要」山邊安之助著、金田一京助編『あいぬ物語 附あいぬ語大意及語彙』: 1-32. 博文館.

金田一京助 (1913b) 「樺太アイヌ語彙」山邊安之助著、金田一京助編『あいぬ物語 附あいぬ語大意及語彙』: 33-60. 博文館.

金田一京助 (1955) 「アイヌ語」市河三喜・服部四郎編『世界言語概説 下巻』研究社.

金田一京助 (1960[1912]) 「アイヌ語学上の一問題」金田一京助博士喜寿記念編集委員会編『金田一京助博士喜寿記念 アイヌ語研究 金田一京助選集 I』: 269-288. 三省堂.

金田一京助 (1960) 「アイヌ語学講義」金田一京助博士喜寿記念編集委員会編『金田一京助博士喜寿記念 アイヌ語研究 金田一京助選集 I』: 1-244. 三省堂.

阪口諒 (2019) 「樺太アイヌ語における人称のクラスと主格目的格人称接辞—東海岸方言を中心に—」『北海道言語文化研究』17: 1-18.

阪口諒 (2020) 「【書評・紹介】M. M. ドブロトウヴォールスキ (著) 寺田吉孝・安田節彦 (訳) 「アイヌ語ロシア語辞典 (1)~(26)」『北海道民族学』16: 80-84.

阪口諒(印刷中)『『アイヌ語ロシア語辞典』のアイヌ語話者に関する情報』『北方人文研究』

14.

千徳太郎治(1929)『樺太アイヌ叢話 全』市光堂.

知里真志保(1973[1942])「アイヌ語法研究—樺太方言を中心として—」『知里真志保著作集』3: 456-586. 平凡社.

知里真志保(1973[1944])「樺太アイヌの説話(一)」『知里真志保著作集』1: 251-372. 平凡社.

ドブロトウヴォールスキー, M. M. (1995~1997)「M. M. ドブロトウヴォールスキーのアイヌ語ロシア語辞典 (1)~(5)」(寺田吉孝訳)『北海学園大学学園論集』84~91.

ドブロトウヴォールスキー, M. M. (2009~2019) 寺田吉孝・安田節彦(2009-2019)「M. M. ドブロトウヴォールスキーのアイヌ語・ロシア語辞典(6)~(26)」(寺田吉孝・安田節彦訳)『北海学園大学学園論集』142~178.

中川裕(1985)「ドブロトヴォールスキーの『アイヌ語ロシア語辞典』について」ナウカ(編)『窓』52: 14-17.

バチラー, ジョン(1928)『ジョン・バチラー自叙伝 我が記憶をたどりて』文録社.

服部四郎編(1964)『アイヌ語方言辞典』岩波書店.

服部四郎・知里真志保(1960)「アイヌ語諸方言の基礎語彙統計学的研究」『民族学研究』24(4): 307-342.

ピウスツキ, ブロニスワフ(2018)「樺太アイヌの熊祭りにて」(井上紘一訳)高倉浩樹監修・井上紘一訳編・解説『ブロニスワフ・ピウスツキのサハリン民族誌—二十世紀初め前後のエンチウ、ニヴフ、ウイルタ』: 483-646. 東北大学東北アジア研究センター.

村崎恭子編(2010)『サハリンアイヌの民話(ウチャシクマ) ウェネネカイペ物語 3 編(AA 研 北東アジア研究 第 2 巻)』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(表紙・背表紙に掲載のタイトルは、奥付と異なり「樺太アイヌの民話」となっている).

山邊安之助著、金田一京助編(1913)『あいぬ物語 附あいぬ語大意及語彙』博文館.

(さかぐち りょう・千葉大学人文公共学府博士後期課程／日本学術振興会特別研究員)

Sakhalin Ainu Texts within the “Ainu-Russian Dictionary”

SAKAGUCHI Ryo

(Graduate student, Chiba University / JSPS research fellow)

Summary:

Mikhail Mikhailovich Dobrotvorskij (1836-1874), a Russian military doctor working in Sakhalin island, left valuable records for the language and culture of Sakhalin Ainu. He spent five years among the Sakhalin Ainu and was one of the most accurate Ainu listeners of his time. His Ainu materials have been collated in a single volume named “Ainsko-Russkij Slovar' [Ainu-Russian Dictionary]”. Although the original book was published in 1875, it has not been fully utilized as materials of Ainu language.

This dictionary contains just over 10,000 Ainu words. Although there are many quotations from other records, more than half of the words (5,733 words) were collected in Sakhalin by the author himself (100 of these words are the names of the Sakhalin Ainu individuals and 511 words are place names). The dictionary by Dobrotvorskij, who lived in Sakhalin for five years, not only contains a large number of words but also is of high quality, and his papers contained in the preface and appendix section are useful to learn the Ainu culture.

Besides, at the end of the appendix, three short Ainu texts are recorded. They are: (a) an address to a friend at his departure; (b and c) conversations between two men that, having quarreled, desire a reconciliation. We can decipher these Ainu texts (Cyrillic alphabet) from the Russian translation (incomplete) and the vocabulary and example sentences in the dictionary section. These texts, which were never published as a complete translation into Japanese, are presented here in their original Cyrillic alphabet transcription and are accompanied by Romanized text and Japanese translation.